

(66%)、第2病週が6例(19%)、第3病週が5例(15%)であった。

検討した内容は、まず始めに患児、母親、父親別に検出菌の頻度を見、次に病週別に検出菌の頻度、3者の検出菌の一致状態の3つについて検討した。

〔結果〕

川崎病児とその両親、32例の咽頭細菌叢を検討した結果、患児と両親の検出菌頻度は表1に示したように、常在菌が最も多く、特異的な菌は検出し得なかった。

次に、病週別に検討してみると、表2、表3、表4に示したように、一定の傾向はなかった。

最後に、患児および両親の3者の検出菌が一致した例を検討してみると、表5に示したように、32例中21例、

65.6%が一致した菌が検出され、菌としてはヘモフィルス属が最も多かった。

以上の結果より、今回の対象では、病原性と思われる菌は見い出されなかったが、本症の発病に、細菌が関与する可能性を否定するものではなく、今後も続けて検討する必要がある。

〔結論〕

1) 川崎病児および両親の32例について咽頭培養を行い、咽頭細菌叢を検討した。

2) 検出菌の頻度、病週別頻度、一致例の検討などを行ったが、特異的な成績は得られなかった。

3) 今後、さらに症例数をまして検討する必要性がある。

川崎病罹患学童の心臓後遺症を発見するためのシステム作りに関する研究

東京女子医大第2病院小児科 草 川 三 治
浅 井 利 夫

〔研究目的〕

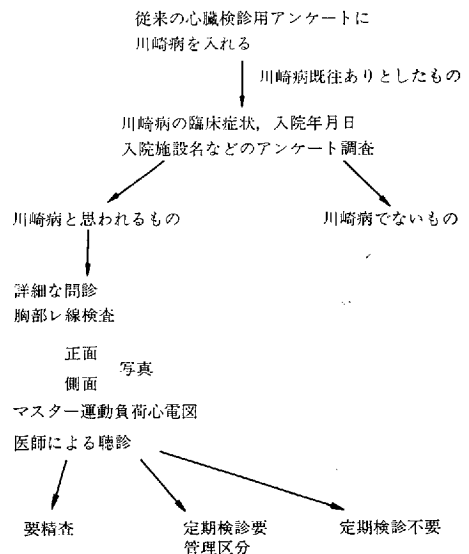
川崎病は心臓障害、特に冠動脈後遺症が注目され、実際に臨床ではこの冠動脈後遺症を残すか、残さないかが一番大きな問題である。しかし、この冠動脈後遺症は1974年に初めて報告されたもので、1974年以前に本症に罹患した児は冠動脈後遺症についてはまったく聞かされていない上、十分な検査もうけていないものが多いことが予想される。これらの児の中には、年令的には小中学校に入学し、冠動脈後遺症などを残したまま、それを知らずに普通の学校生活を送っている児がいる。そこでこれらの川崎病罹患の学童を検診し、心臓後遺症を発見することは非常に意味があることと思われる。今回は、川崎病罹患学童の心臓後遺症発見のためのシステム作りを試みた。

〔方法〕

川崎病罹患学童の心臓後遺症を発見するためのシステムを作ることに当り、2つの点を考慮した。1つは、現在行われている学童の心臓検診のシステムに従って、同時に無理なくできるようにした。第2には、これまでの川崎病心臓障害に関する知見のうち、最小必要限度、ど

この場所でもできる検査方法などを選んだ。

表1 川崎病後遺症児発見のための検診方法



【結果】

方法の所で述べたようなことを考え、でき上がったシステムは、表1に示したようなものである。このシステムは、まず初めに従来的心臓病検診用アンケートにて川崎病罹患の既往がありと答えた児に対し、再度川崎病の急性期の状況、現在の状況についてアンケート(表2)調査する。このアンケートは、1つには川崎病であるかどうかを確認する目的であり、特に喘息、溶連菌感染症を本症と診断されており、これらの児を除外するためであ

る。もう1つは、現在、病院などで管理されている児を精密検査の対象から除外するためである。

このようなアンケート調査で選び出した児を対象にして、精密検査する。精密検査は具体的には、運動負荷心電図、胸部レ線写真を正面と側面(右→左)の2方向撮影し判定する。

このようなシステムを用いて、実際に検診を延140,000人に行い、心臓後遺症児11人を発見した。この中には冠動脈瘤2例、左心室のHypokinesisが3例であった。

表2 川崎病再調査票

先日、お子様についての「心臓病調査票」をご記入いただきましたが、その中で「川崎病にかかったことがありますか?」の質問に、あなたのお子様は「はい」と答えてありました。川崎病にかかったお子様は、極く稀れではありますが再発したり後遺症を残すことがあります。しかし、治ゆ後すでに1年以上経過した場合、そのような心配はほとんどありませんが、念のため川崎病と診断されたときのことをお聞きしたいと思います。ご面倒でも必要事項をご記入のうえ、養護の先生へご提出ください。

なお、川崎病は正式には「小児急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群(略称 MCLS)」と呼ばれ、しょう紅熱やその他の発しん性疾患と混同されていることがあります。

*お願い

- ① 「はい」「いいえ」のどちらかを○で囲んでください。空らんには必要事項を書き入れてください。
- ② 全部「いいえ」の方も必ずこの調査票をお返してください。

学 校 長

 学校名 年 組
 氏 名 男・女 年 月 日生(歳)

1. 医師に川崎病といわれたのはいつ頃ですか。

昭和 年 月頃(満 歳 カ月の頃)
 そのときのご住所: _____

※ もし差支えなければ、川崎病の診断を受けた医療機関名(わかれば主治医名も)をお教えてください。

医療機関名: _____

主治医名: _____

2. そのとき、次に示す①～⑨の症状があったかどうかをお答えください。

- | | | |
|-------------------------------------|---|--------|
| ① 高い熱が何日も(38度以上が5日以上)続きましたか。 | 答 | はい・いいえ |
| ② 両方の眼が赤くなりましたか。 | 答 | はい・いいえ |
| ③ くちびるが真赤になりましたか。 | 答 | はい・いいえ |
| ④ 手のひらや足のうらが真赤になって「しもやけ」のようにはれましたか。 | 答 | はい・いいえ |
| ⑤ 舌がいちごのように赤くなりましたか。 | 答 | はい・いいえ |
| ⑥ へんとう腺が真赤にはれましたか。 | 答 | はい・いいえ |
| ⑦ 身体に発しん(赤い斑点)ができましたか。 | 答 | はい・いいえ |
| ⑧ 首のリンパ腺がはれて痛がりましたか。 | 答 | はい・いいえ |
| ⑨ 後になって指先から皮がむけましたか | 答 | はい・いいえ |

3. そのとき、入院しましたか。 答 はい(約 日間入院した)・いいえ
 いいえと答えた方………通院しましたか。 答 はい(約 日間通院した)・いいえ

4. 家族(兄弟)の中で川崎病といわれた方はいらっしゃいますか。 答 はい・いいえ
 はいと答えた方………どなたが いつ 昭和 年 月 日頃(満 歳 カ月の頃)

5. 現在も川崎病経過観察のため医療機関で定期的受診していますか。 答 はい・いいえ
 ※ もし差支えなければ、現在受診している医療機関名(わかれば主治医名も)をお教えてください。

医療機関名: _____

主治医名: _____

6. 現在のお子様の健康状態はいかがですか。(余白にお書きください。)

〔結論〕

- (1) 川崎病罹患学童の検診システムを確立した。
 (2) 試作した検診システムを用いて検診したところ140,000人中、2名の冠動脈後遺症児の他、左心室機能不全例3例の計5例を発見した。

(3) 最近では、全国的にこの検診システムが使用され、成果を上げている。

(4) 今後、このような検診で発見された児の管理の方針を決める必要がある。

フロベンの使用経験

東京女子医科大学第2病院小児科 草川三治
 浅井利夫
 木口博之

〔目的〕

川崎病の治療剤として、アスピリンが広く用いられて

表1 対象の性別・年齢別分布

年令	男児	女児	計
4～6ヶ月	2例	1例	3例
7～11ヶ月	5例	2例	7例
1才(代)	6例	4例	10例
2才(代)	4例	2例	6例
3才(代)	3例		3例
4才(代)	1例	2例	3例
5才(代)	1例	1例	2例
6才以上	2例	1例	3例
計	24例	13例	37例

表2 対象のスコア

スコア	症例数	計
0点	3例	28例(76%)
1点	4例	
2点	8例	
3点	4例	
4点	5例	
5点	4例	
6点	5例	7例(19%)
7点	2例	
8点		
9点	1例	2例(5%)
10点		
11点		
12点	1例	
計		37例

いることは、周知のことである。しかし、アスピリンを用いると急性死の防止には効果があるようだが冠動脈瘤の発生は完全に防止し得ない上、大量のアスピリンを用いると、しばしば肝障害がみられることがある。そこで、アスピリンより一層効果ある、副作用の少ない治療剤を見出す目的で、フロベンを川崎病児に用いてみた。今回、川崎病のフロベン療法の臨床効果と肝機能を中心とした副作用の検討を行ったので報告する。

〔対象及び方法〕

対象は、東京女子医大第2病院小児科に急性期に入院した川崎病児37例である。性別・年齢別分布は表1に示したように、男児24例、女児13例で最年少例は、4ヵ月児、最年長例は7才10ヵ月児であった。37例の対象の重

表3 フロベン使用開始病日

病週と病日		症例数	計
第1病週	第2病日	2例	31例(84%)
	第3病日	1例	
	第4病日	6例	
	第5病日	8例	
	第6病日	7例	
	第7病日	7例	
	第2病週	第8病日	
第9病日		2例	
第10病日		1例	
第11病日			
第12病日			
第13病日			
第14病日			
第3病週		1例	1例(2%)
計			37例



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔研究目的〕

川崎病は心臓障害,特に冠動脈後遺症が注目され,実際に臨床ではこの冠動脈後遺症を残すか,残さないかが一番大きな問題である。しかし,この冠動脈後遺症は1974年に初めて報告されたもので,1974年以前に本症に罹患した児は冠動脈後遺症についてはまったく聞かされていない上,十分な検査もうけていないものが多いことが予想される。これらの児の中には,年令的には小中学校に入学し,冠動脈後遺症などを残したまま,それを知らずに普通の学校生活を送っている児がいる。そこでこれらの川崎病罹患の学童を検診し,心臓後遺症を発見することは非常に意味があることと思われる。今回は,川崎病罹患学童の心臓後遺症発見のためのシステム作りを試みた。